

ジョン・ウェブスター「モルフィ

公爵夫人」について

谷 崎 寿 人

1

ジョン・ウェブスター (John Webster) の「モルフィ公爵夫人」(The Duchess of Malfi) は、前作「白魔」(The White Devil) の場合と同じく、その執筆された正確な時期については不明である。諸説あるうちで、全集の編纂者であるルーカス (F.L. Lucas) は全集第二巻の冒頭でおよそ次のように述べている。まず劇中アントニオ (Antonio) 役を演じた俳優 William Ostler が死亡したのは1614年12月16日 (これは Wallace という人が1909年10月2日と4日に The Times に寄せた投書による) で、これが下限であり、チャップマン (Chapman) の Petrarch's Seven Penitential Psalmes と ダン(Donne) の An Anatomy of the World のそれぞれ第一部が1611年、それぞれ第二部が1612年に出版され、両者の第二部中の文に「モルフィ公夫妻」中の科白に似たものが見出されるので、これが上限である。さらに彼ウェブスターが、1612年11月6日に死亡した Henry Frederick にささげた哀悼歌 A Monumental Column (1612年12月25日登録) に「モルフィ公爵夫人」の科白が似かよところがあり、かつまたこれら両作品がシドニー (Sidney) の Arcadia (1613年再版) によるところが多い。そこで執筆時期は1613—1614年という結論になる。(Still we may say that such evidence as there is points to the conclusion that *the Duchess of Malfi* was written after, though not very long after, the sister-tragedy it so much resembles, 1613—4)¹⁾

この劇も、前作「白魔」と同様16世紀のイタリアにあった実話をもとにしている。ウェブスターが、それによってこの戯曲を作りあげたと推定されるものは、ペインター (William Painter 1540—94) の翻訳小説集 The Palace of Pleasure の第2巻第23話による。いうまでもなくウェブスターはこの原話を彼の解釈によって種々改変を加えている。17世紀になって復讐劇の流行をみるわけであるが、当時の観客には特にこのような(「白魔」や「モルフィ公爵夫人」) 主題の劇が好まれたものらしい。とに

かく登場人物のほとんどすべてが殺害されるというすさまじさである。善人と悪人は截然としている。一方には、公爵夫人、夫人の家令でのち夫人の秘密の再婚相手となるアントニオ、夫人の侍女で最後まで夫人に忠実であるカリオラ (Cariola) があり、いずれも非業の死をとげる。これらは誰ひとりとして邪悪な行為はないにもかかわらず、公爵夫人の二人の兄にうとまれてそのような結果となる。この反対側に立つのが、夫人の双生児の兄ファーディナンド (Ferdinand) と、これら二人の兄の枢機卿 (The Cardinal)、およびファーディナンドの命により夫人の行状をさぐるため、その邸に住みこむボゾラ (Bosola) である。

ファーディナンドと枢機卿がどうして妹の公爵夫人にあれほどの敵意を抱くのか理解しがたいものがある。まして他人に命じて夫人を絞殺させるにおよんでは不可解である。この理由は、諸家の挙げるとおりファーディナンドが妹に対して近親相姦的愛情を抱いていて、妹の再婚に強く反対をとнаえたことと、秘密の再婚の夫アントニオが、公爵夫人より身分が低いため、この結婚を認めたくなかったということであろう。そして特に後者は当時一般に認められぬ事柄であつたらしい。それにしても夫人の兄たちの夫人を憎むことはげしく、これが血肉をわけた兄妹であろうかと思われるほどである。ファーディナンドはいう。

Damn her: that body of hers,

While that my blood ran pure in't, was more worth

Than that which thou wouldst comfort, call'd a soul……(IV. i. 122-3)*

公爵夫人殺害に立ち会うボゾラはもちろん悪党であるが、後に改悛の情を示すことになる。これがまことであれば彼は真の悪人ではない。この劇の資料となった16世紀イタリアおよびこの劇が上演された17世紀初頭のイギリスにあってはなかなか栄達への機会はなかった。野心にもえるボゾラは立身出世のためには自らの意志に反してもその機会を得ようとしていたはずである。第一幕第一場で

I will thrive some way: black-

birds fatten best in hard weather; why not I, in these

dog-day? (I. i. 37-9)

という。そしてファーディナンドと枢機卿の意にそうためのあらゆる悪事をやってのけ、遂に自らもファーディナンドの刃に倒れることになる。その最後は次のような科白でしめくくられている。

Revenge, for the Duchess of Malfi murdered

引用文は Gohn Russel Brown 編 'The Duchess of Malfi' (The Revels Plays)による。

By th Arragonian Brethren ; for Antonio,
Slain by this hand ; for lustful Julia,
Poison'd by this man ; and lastly, for myself,
That was *an actor in the main of all*
Much 'gainst mine own good nature, yet i'th' end
Neglected. (V. v. 81-86 イタリア体筆者、Arragonian Brethren はファーディナンドと枢機卿のこと、this man は枢機卿)
ここにはっきり Revenge といっているようにボゾラは自身のためと同時にモルフィ公爵夫人のために復讐したのであった。

2

「すべてにおいて主役」(An actor in the main of all) というボゾラは実に多様な役割を演じているといえる。ベリ (Ralph Berry) はボゾラを論ずる一節で次のように言っている。

What emerges from all this is the variety of roles that Bosola plays. Intellectual, melancholic, spy and assassin, tomb-maker and bellman, causer and observer of death—he plays them all ; and it is at least partly true of Bosola, as of Flaminmineo, that in acting he is expressing himself. And it is strongly suggested, in his dying words, that he sees himself in this light……²⁾

ボゾラは公爵夫人と侍女カリオラを死刑執行人が絞め殺すのを見とどけるまであらゆる悪事をなし、この時が転換点となって、以後善に向かうことになる。

O sacred innocence, that sweetly sleeps
On turtles'feathers, whilst a guilty conscience
Is a black register, wherein is writ
All our good deeds and bad, a perspective
That shows us hell! that we cannot be suffer'd
To do good we have a mind to it!
This is manly sorrow (IV. ii. 355-61)

ここに至るまでのボゾラは、ファーディナンドのスパイとして、第二幕第一場の後半で、公爵夫人にあんず(杏)をさしだし、その食べかたをみて夫人の妊娠をうたがい、なんとかこの事実を確認しようときわめて執拗に努力する。

The apricock trick works wonders, and while it is working Bosola watches

and comments in a state of admiration at his own superior intelligence and disgust with the Duchess' womanliness.³⁾

とボウクランドは評する。ボゾラは既に「あなたがわたしにしてくれた親切に対し忘恩の態度をとらぬよう人間がつくりだす限りの悪をなさねばならない。」(I. i.273-5)と心得ている。それが自分自身の栄達のためであれば、やとい主たるファーディナント、枢機卿への忠誠が彼の生活の第一義となった。作者ウェブスターはボゾラの科白、行動を通じて、彼のように権勢欲が多分にありながら尋常の方法ではその欲望を充足できない者のとるべき道を観客に提示している。これは当時のイギリスの観客にとっては、一方では憎悪の対象となり、他方立身のためにはこれ以外の道はないとみられる姿ではなかったろうか。

次いでボゾラの情報収集行為はさらに発展する。第二幕第三場では公爵夫人がひそかに出産したその夜その邸内を歩きまわって、アントニオが落した紙片を拾い、それは生れた子どもの天宮図 (a child's nativity calculated II. iii. 55) であることを知り、文章中に日付は12月19日とあるのを読んで、「今夜のことだ」と叫ぶ、そしてこの事情を即時ローマにいるファーディナントに報知する。

第三幕は数年後のことであり、公爵夫人とアントニオの子はさらに二人ふえている。このことは世間に取沙汰されているが、子どもの父親がアントニオであることはまだ発覚していない。ボゾラにもわかってはいない。第二場で公爵夫人、アントニオ、カリオラ三人の談話ののち、アントニオがカリオラをうながして退場、いれかわりにファーディナントがこっそりと登場、「名声 (reputation)」について妹に説教する。ファーディナント退場後ボゾラ、アントニオがそれぞれ数回登場退場をくりかえす。身の危険を感じた公爵夫人は一計を案じ、家令アントニオが帳簿の記入で不正をおこなったため解雇という形でアントニオを邸から去らせ、公爵夫人もあとからアントニオのところへ行くということにする。その時ボゾラと共に公爵夫人邸にあらわれた役人たちは、こもごもアントニオの悪口を夫人にきかせるが、ボゾラだけはアントニオを弁護する。家柄よりも人物を尊重せよというのがボゾラの意見である。この長広舌の最後に次のようにいう。

Fare thee well, Antonio; since the malice of the world
Would needs down with thee, it cannot be said yet
That any ill happened unto thee,
Considering thy fall was accompanied with virtue. (III. ii. 270-3)

このことばに感動した公爵夫人は、遂に

This good one that you speak of, is my husband (III. iii. 275)

と告白すると、ボゾラは非常に驚き「この時代に、ひとりの男を、ただその人間的な価値だけで夫にする（公爵夫人という身分ある人物がである）ことがあろうか。」という。夫人にこの秘密は守って欲しいといわれ、秘密は守ると答えるものの、この時のボゾラの心中は次のとおりである。

O this base quality

Of intelligencer! why, every quality, ith' world

Prefers but gain or commendation;

Now, for this act I am certain to be rais'd,

And men that paint weeds to the life are prais'd. (III. ii. 327-31)

スパイの卑劣なことは充分知りながら、このスパイ行為によって昇進することは確実と思っている。

第四幕第一場では、兄たちによって監禁されている公爵夫人のもとへ行くと、ファーディナンドに命じられたボゾラは、次第に気持が動揺してきている。

Never in mine own shape

That's forfeited by my intelligence,

And this last cruel lie, when you send me next,

The business shall be comfort. (IV. i. 134-7)

「今度公爵夫人のところに行かされるときは、慰める役をしたい。しかも今までと同じ素顔では行きたくない。」というのである。この後第二場においては、素顔で行くことはせず、ト書に……after which Bosola, like an old man, enters……とあるように、老人に紛して登場し、自分は墓を作る商売で公爵夫人の墓を作りにきたのだという。兄たちの命で公爵夫人が処刑されたのち、気落ち（dejection）して——つまり公爵夫人ならびに夫人に忠実であったカリオラが絞殺されたのを目撃し彼女らをあわれと思ったため——あることを心に期してミランに行く（Then I'll post to Milan. IV. ii. 401）

第五幕第二場ファーディナンドは狼狂（lycanthropia）にかかっている。枢機卿はボゾラに対して公爵夫人の死をまだ知らぬふりをしてみせ、妹の結婚のためにアントニオを殺せという。しかし枢機卿の心中はやがてボゾラに読まれてしまう。第四場枢機卿の館の中でボゾラは枢機卿が自分を殺そうとたくらんでいると思い、かくれているところへアントニオ登場、ボゾラはアントニオを刺客と思いこみこれを刺す。全くのあやまちであった。彼はこう叫ぶ。

Antonio!

The man I would have sav'd'bove myown life! (V. iv. 52-3)

第五場アントニオの死体をになった従者をつれてボゾラは枢機卿の前に登場、枢機卿がボゾラにむかって「……汝の顔には恐怖をまじったなにか重大な決意が見える (V. v. 9)」という、ボゾラは「決意はこのように燃えあがって行動となる。わたしはおまえを殺しにきた (V. v. 10)」と答え枢機卿を刺す。狂ったファーディナンド登場、枢機卿を刺し、ボゾラをも刺す。ボゾラは Now my revenge is perfect. (V. v. 81) といひファーディナンドを刺し殺す。その後あらわれたマラテスティ (Malateste) に「どうしてアントニオが死んだのか」ときかれたボゾラは

In a mist: I know not how—

Such a mistake as I have often seen

In a play: (V. v. 94-6)

のことばを残して死ぬ。

結局、この劇に出てくる悪人たちの中ではボゾラが最も往生際のよい人物としてえがかれている。流血悲劇、復讐劇においては当然のことながら、悪人の方が力強くえがかれ、観客の眼に強く映ずるようになっていいるが、その中でもボゾラの姿は格別である。しかもボゾラは——不平家で、やとわれて悪の手先きとなった人物 (the hired instrument of evil⁴⁾) が途中で改心、公爵夫人に代っての復讐と、アントニオのために助力を思いたって実行をする (あやまってアントニオ殺害という結果になってはしまったが) に至っては、公爵夫人以上の重要な役割を舞台の上で演ずる人物となっている。公爵夫人の死後、ボゾラはじめファーディナンド、枢機卿すべてが死ぬ第五幕では、道徳律のもとでは結末はボゾラの復讐成功に終らねばならなかった。しかしボゾラが狂えるファーディナンドに刺されたのは偶然のはたらきとして、ウェブスターは十分に計算して作りあげたものだろうと思われる。

ボゾラの世に出るための動機と比較すれば、ファーディナンド、枢機卿が妹である公爵夫人を殺す動機はきわめてあいまいである。第二幕第五場で公爵夫人の出産の報を受けた二人は非常に怒る。

Ferd. Would I could be one,

That I might toss her palace 'bout her ears,

Root up her goddly forests, blast her meads,

And lay her general territoryas waste

As she hath done her honours.

Card. Shall our blood,
The royal blood of Arragon and Castile,
Be thus attained? (II. v. 17-22)

二人が怒るのは公爵夫人の生んだ子の父親が問題であって、次の幕で (III. i) ファーディナンドは、公爵夫人の再婚相手の名を示してすすめる。額面どおりにうけとれば、再婚に反対なのではなく相手の身分が問題であるらしい。一度目の結婚相手にはならぬ苦情をさしはさんでいないところからこれは当然なことであろう。しかしながら公爵夫人が再婚の希望を次のように表現すると

Why should only I,
Of all the other princes of the world,
Be cas'd up, like a holy relic? I have youth,
And a little beauty. (III. ii. 137-40)

ファーディナンドはこれに対して

So you have some virgins
That are witches: (III. ii. 140-1)

という。こうなると相手の身分が問題であるよりも再婚しないことが美徳であると確信しているらしい。したがってこれに背反すれば、それは死に値するという論理である。そして妹殺害を命じたために、のちに気がふれることになるが、ボゾラほどの強烈さはもちあわせていないので観客に与える印象は強くないことになる。まして従容として死に就く公爵夫人には、その精神において及ぶべくもないのである。悪党としては小なるものということであろう。枢機卿は気がふれぬだけ強さがあるというべきか。しかし彼とても最後には

O Justice!
I suffer now for whathath former been;
Sorrow is held the eldest child of sin (V. v. 54-5)

という。

3

公爵夫人は、ファーディナンドに再婚を反対されると

Shall this move me? If all my royal kindred
Lay in my way unto this marriage,
I'd make them my low footsteps: (I. i. 341+3)

と意気軒昂たるところを示す。彼女にとって再婚は道徳上なんら非難、反対に価するものではなかった。彼女はアントニオとの再婚に関して自分は決して過ちを犯してはいないと信じている。過ちを犯しているのは兄たちだと思っているのだ。

ブラッドブルック (M.C. Bradbrook) はこの公爵夫人の評価を次のように要約している。

In law, the Duchess was innocent; by social standards she was at first reckless and intemperate; by ethical and religious standards she was an instinctive creature awakened by suffering to maturity. Hers was orinal sin, not personal sin; like King Lear's uncontrolled greed for affection and rage of frustration⁵⁾

「罪のない(innocent)」という点からいえば、ファーディナンドさえそれを認めている。それはボゾラや処刑を委ねられた者たちが、公爵夫人を扼殺してから、彼ファーディナンドが登場し、夫人の横たわっている姿を見るとボゾラにむかいこういう。

Let me see her face again:

Why didst not thou pity her? what an excellent

Honest man mightst thou have heen

If thou hadst born her to some sanctuary!

Or, bold in a good cause, oppos'd thyself

Weth thy advanced sword above thy head,

Between *her innocence* and my revenge! (IV. ii. 272-8 イタリア体筆者)

さらには、彼が再婚に反対していたのは、

Only I must confess, I had a hope

Had she continuid widow, to have gain'd

An infinite mass of treasure by her death:

And that was the main cause:…her marriage!—

That drew a stream of gall, quite through my heart. (IV. ii. 283-7)

である。ファーディナンドの真意が「妹がこのまま未亡人であれば、彼女の死後莫大な財宝が手にはいることになる」にあったのか、疑問であるが、それまでの主張をくつがえして無罪を認めるのである。そしてこのあと彼は狼狂にかかり前述したような結末となるのである。

公爵夫人は再婚については己れの意志をつらぬく強靱さをもっているにもかかわらず、老人に変装し「墓作り」と自称するボゾラ、枢繩などをもった死刑執行人に対しては、生きるための弁解は一言もいわない。この点はこの時侍女カリオラのいろいろ

と理由を挙げて死ねない、死にたくないと叫ぶのとは、全く異なるところである。つまり「無罪」ではあるが、兄たちの命、ひいては「運命」の意のままになる。それが悲劇であり、彼女の悲劇の後半生だと認めているわけである。したがって「死を恐れたりはしない」と言明し、執行人に対していう。

Pull, and pull strongly, for your able strength
Must pull down heaven upon me:—
Yet stay; heaven-gates are not so highly arch'd
As prince's palaces, they that enter there
Must go upon their knees. —[Kneels.]… (IV. ii. 230-4)

公爵夫人はこの方法でしかこの世の苦難をのがれられない、したがって既に死の恐怖は彼女にはありえなかった。

アントニオもまた善人である。ボゾラが立身のため悪人に忠誠をつくしたように、彼は公爵夫人の愛情に一途にひかれてゆく。

That Fortune may not know an accident,
Either of joy or sorrow, to divide
Our fixed wishes (I. i. 489-91)

とはアントニオの願望であるが、公爵夫人の兄たちが二人の結婚を許すはずがなく、夫人の身の破滅、ひいては彼の身にも同様のことがおこるのはほぼ確実と見通されるのに、やはり運命にしたがって苦難を負うてゆくのである。ウェブスターは善悪の葛藤もさることながら、抗しがたい運命のもたらす悲劇を存分に観客に示したかったのであろう。

註

- 1) F.L. Lucas, The Complete Works of John Webster Vol. II (Originally Published 1927, Reprinted 1966 by Gordian Press INC) p. 4
- 2) Ralph Berry, The Art of John Webster (Clarendon Press・Oxford 1972) p. 141
- 3) Gunnar Boklund, The Duchess of Malfi: Sources, Themes, Characters (Harvard University Press 1962) p. 104
- 4) Ibid. p. 102
- 5) M.C. Bradbrook, The uses and conventions of Elizabethan Tragedy (Cambridge at the University Press 1969, First edition 1935) p. 209

(たにざき ひさと 本学助教授・英語)